

「〈シンポジウム〉 古文教育における文法学習
——ニワトリが先かタマゴが先か——」をめぐって

吉 井 美弥子

一、シンポジウム開催に至るまで

早稲田大学国語教育学会二〇二一年度夏季大会(第二八八回)は、二〇二二年六月一九日(土)にオンラインにて開催された。本稿では、この夏季大会シンポジウムのコーディネーターならびに司会を務めた立場から、その経緯の記録と報告を記したい。

まず、大会が開催に至るまでの経緯について述べておきたい。最初に本学会事務局から「二〇二〇年度夏季大会シンポジウムのコーディネーターと司会を」との打診があつてお引き受けしたのは二〇一九年一月であつた。しかしながら、周知の通り、二〇二〇年は年明け早々から新型コロナウイルスの感染拡大が加速していったため、二〇二〇年六月開催予定であつた夏季大会は延期となつた。そして二〇二二年六月、冒頭で述べたように、本大会は、野村亞住氏をはじめとする事務局のご尽力によるオンライン開催

によつて実現のはこびとなつた。学会代表委員の大津雄一先生、そして松本正恵先生をはじめとする事務局各位に心より御礼申し上げる次第である。

以上の経緯によつて、旧事務局の籠尾知佳氏を通じて最初にシンポジウムのお話をいただいた二〇一九年の晩秋から、二〇二一年五月にシンポジウム趣意文(後掲)を事務局へお送りするまでに一年半ほどの間をおくこととなつた。その間、本シンポジウムでどのようなテーマを取り上げるかについて、私自身の中でも紆余曲折があつたことをここに記しておきたい。当初お引き受けした際には、「高等学校での新学習指導要領実施に関わる文学(とくに古典文学) 教育の問題」を取り上げようと思つていた。しかしながら、その後、教育現場においてコロナ禍に直面した時、改めて「対面で実施する教育の重要性(必要性)」を訴える思いが強くなり、オンラインによる教育の諸問題を取り上げようかと思つた

時期もあった。もつともその一方で、次第にZoomミーティング等を用いたオンラインによる教育や学会活動の可能性——本当に遅ればせながらの話で恐縮だが——も実感するようになってきた。

このようなことを長々と記したのは、僭越ではあるが、私がシンポジウムのテーマを模索してきた過程が、この一年半の間に教育が直面した課題——教育の内容や方法について、いかに大きな変化が迫られたか（いや、現在も迫られているか）——をそのまま示していると思われたからである。

さて、この間、私は文学教育に関わる二つのシンポジウム——日本文学協会第74回大会「文学教育の挑戦」(二〇一九年一月七日、大正大学にて開催)、中古文学会二〇二〇年度秋季大会「これからの古典教育を考える」(二〇二〇年一月十七日、オンラインによる開催)——へ登壇する機会に恵まれた。その折の口頭発表は活字化しているので、¹⁾参照いただければ幸いである。

その後、日本文学協会でのシンポジウムを機に、早稲田大学の金井景子先生とともに、日本文学協会の中に文学教育部会を設けるに至った。二〇二〇年はコロナ禍に見舞われ、部会の本格的な始動がかなわなかったが、金井先生の旺盛な行動力のもと、二〇二一年一月から、当面はZoomミーティングを用いて毎月一回の研究会を開催するに至り、文学教育の諸問題を取り上げて考察する絶好の機会となっている。²⁾この部会における参加者の発表、教示、発言にも多大な刺激を受けつつ、早稲田大学国語教育学会夏季大会シンポジウムに臨むことができた。部会参加者各位にこの場をお借りして謝意を表したい。

以上、述べてきた過程を経つつ、それではシンポジウムはどのようなテーマを取り上げるべきか、考えに考えた結果、古文という科目を指導する上で必ずや直面する(？)「文法学習」の問題を取り上げることとした。かつて私自身が高等学校の教壇に立っていた折、また現在、勤務する大学で学生たちが高校でどのような古文学習を経験してきたかを知る時、文法学習の「取り組み方」がいかに重要かをしばしば痛感させられてきた(いる)からである。文法学習の取り組み如何によって、生徒たちの古文という科目への興味が左右されてしまうといっても過言ではないほど、古文教育における文法学習の問題は根深いようだ。そこで、いわば原点回帰的なこの課題を投げかけて、これを共有し考察を試みたいという思いから企画したのが、本シンポジウムのテーマ「古文教育における文法学習——ニワトリが先かタマゴが先か——」であった。次節で、その際に提示した「趣意文」をそのまま掲げる。

二 シンポジウム趣意文

二〇二二年度より高等学校において、いよいよ新学習指導要領による「現代の国語」と「言語文化」の新科目が始まる。この「言語文化」という科目の設置が考案された背景には、高校生の「古典嫌い」があったといわれる。そして、高校生がとくに「古文が嫌いになる」理由のひとつとして必ず挙げられるのが、「文法の学習が嫌いだから」というものであるようだ。学習指導要領が大きく改訂されたことを受けて、近年、文学教育の問題がさまざまな場を取り扱われるようになってきている。その中には古典教育が

必要か不要かという問題さえ浮上している。しかし、すぐ目の前に近づいている「言語文化」という科目においても、少なくとも現時点で古典は必修の学習の対象となっている。要するに、高校の教育現場では、何かと嫌われることが多いらしい古文を、依然として教える必要があるのだ。そこで、本シンポジウムでは、前述したように、まずは「古文が嫌われる」理由のひとつである文法学習の問題に注目してみたい。そもそも、高校・大学を問わず、教員によって意見が大きく分かれるのが、この文法学習への取り組みについてであるように思われる。本シンポジウムでは、ご登壇の先生方から「古文教育における文法学習」をどのように考えるかという問題についてご提言をいただき、改めてこれからの古文教育を具体的に考えていく契機としたい。副題に付した「二ワトリが先かタマゴが先か」とは、諸賢ご推察の通り、古文学習を考える際の悩ましい問題、「内容の解釈が先か、文法学習が先か」の喩として掲げたものである。

三、シンポジウムについての報告

前節に掲げた「趣意文」のもと、シンポジウム当日は、登壇者の有馬義貴先生、小林賢太先生、根本駿先生が、それぞれ実にかのもったご提言を試みてくださった。詳細については、お三方の玉稿が本誌に掲載されているので、ぜひそちらをお読みいただきたいが、当日司会を務めた者として、簡単ながら報告したい。

有馬先生は、古文や文法を学ぶことが「社会・世界」を知ることにつながる、と「古文学習のためだけではない文法学習」の意

義と理念を明快に論じられた。『竹取物語』の冒頭部分について試みられた分析も説得力があった。小林先生は、古い時代の教育の名残ともいえるような現在の文法学習のあり方について疑問を投げかけた上で、和歌を教材として用いて文法学習をすることのメリットを挙げ、具体的な実践方法をご提案くださった。根本先生は、ご勤務先の高等学校二年生を対象に実施した、古文に関する実に貴重なアンケート³⁾をご提示くださるとともに、教育現場での文法学習において「文法用語」がいかに問題があるかを的確にご指摘くださった。登壇者三者三様のアプローチによる刺激的なご提言があった後、活発な議論がなされ、続いてフロアの諸氏からも続々とご質問が発せられて、文法学習の「問題」と「可能性」を考える、充実したシンポジウムとすることができた。

事務局からのご報告によれば、当日は会員と一般参加者をあわせて、北海道から九州まで全国各地より一二五名もの参加があったとのことである。オンライン開催の利点が大いに活かされたことを実感するとともに、シンポジウムのテーマへの関心の深さも窺え、文法学習の問題の重要性を改めて痛感させられた。高等学校や大学の先生方はもとより、全国のさまざまな大学で国語科教員を目指しておられる学生や大学院生の皆さんも多数参加してくださったこともわかり、これからの時代の国語教育に真摯に取り組もうとしている意欲的な若い人々が全国各地に確かにいることが実感できて、何より心強く思ったことを最後に記しておく。

注

(1) 拙稿「これからの文学教育」(『日本文学』二〇二〇年四月)、「古典の魅力
を発見させること——研究は教育に活かせるか——」(『中古文学』第一〇
七号 二〇二二年五月)。

(2) 詳しくは日本文学協会の各部会活動案内をご参照いただきたい。
本シンポジウムに際して、根本先生が生徒の皆さんに向けてアンケートを
実施することをご快諾くださった聖光学院中学校高等学校の校長先生をは
じめ、ご関係の先生方、また、丁寧に協力くださった生徒の皆さんにも
この場をお借りして心より御礼申し上げます次第である。

(和洋女子大学)